津田昇平教話　第三十一話

令和三年　一月　三十一日　朝の教話

金光大神、拝むと言うな、お願い届けいたしてあげましょうと申してよし。願う氏子の心で頼めいと申して聞かせい、わが心におかげはあり。

おはようございます。令和三年一月三十一日。一月の晦日(みそか)をお迎えさせて頂きました。令和三年になって今日で一月が終わります。

「今月今日(こんげつこんにち)」という言葉が御道(おみち)にはございますね。今月今日で頼めい。一日一日ですし、その一日一日も、こう小さく見たらほんとに一瞬一瞬の積み重ねです。その一瞬一瞬を神様と共に過ごして、今日一日を過ごすことができる。一瞬一瞬の今日一日を積み重ねることで今月をお迎えすることができ、またそれが、この今日一日、今日この一瞬一瞬の今を、神様と共に、金光大神様(こんこうだいじん)にお縋(すが)りしながら過ごさせてもらっていくという中で、今年も出来上がっていくんやなぁと。それも、一生もそうなんだろうなぁということを思います。

この天地の間で命を頂いた人間として、神様という親神様にお縋りをして、そのお恵みの中で生活をさせて頂く。これが人間らしく生きるということなんやなぁと。

おかげの中に生まれて、おかげの中で生活をして、そして、おかげの中に死んでいく。その、人としてのあるべき一生を、無事にそれぞれお互いに全うすることができるように、そのことをやはり、願わせて頂きます。

生きている間はいろんなことが起こってきますから、嬉(うれ)しいこともあれば、悲しいことやら、辛いこともちろんございます。

だからこそ神様にお縋(すが)りしながら、今月今日(こんげつこんにち)でお縋りしながら生きていくわけですけれども、寿命というのは自分で決められるわけでもありません。長いも短いも、人心(ひとごころ)で考えたら、早いやら短いやらってあるにせよ、いよいよは天地の神様にお任せするより他ありません。

まあいずれ必ず、誰もが例外なく死をお迎えするわけで、そのおかげの中に死んでいく。おかげの中で生活をしてね、そしておかげの中に死んでいく。おかげの中に飛び込んでいくんですよね、死も含めてね。

あの世に行っても、あの世に行くってよく言いますけど、天に戻っていく。肉体はね、地に戻っていくということですから。結局、お世話になっていくわけですから。ただ、その一生をほんとにこう、必ずしも容易

ではない人生を生きるということを、無事に終えさせて頂けるというのは、本当に偉業(いぎょう)でね。なんの気無しに生きれる時は楽なもんなんですけど、意外とね。でもひとたび本当に、生きる死ぬということを意識せざるをえない苦しみになったとたん、本当にもう、一日、あるいは一瞬をどう生きていいのか分からんいうことがございます。

そこをお縋りしながら一日一日を乗り越えさせて頂いて、そして、その繰り返しの中で、天寿(てんじゅ)を全うすることができる。天寿を全うする。天から定められた寿命を全うするというのは、まあ本当に大変なことでね。大変な偉業やと思います。

それを神様のおかげを頂き、また御道(おみち)の信心を頂いているのであれば、

金光大神様の御取次、み教えを頂きながら、そしておかげを頂く器を作らせて頂きながら、生きることができるというのは本当に恵まれてますよね。こういうご縁に頂いているというのは。

これが何もなかったらほんとにね、どないして皆、生きてはるんでしょうね。一生懸命は皆生きると思うんですよ。皆一生懸命生きるとは思うんですけれど、一生懸命生きようと思っても一生引きこもる人もおるでしょうしね。一生懸命生きてても、中には、浮浪者のような形にね、ならざるを得ない方々もいらっしゃるでしょうし、一生懸命生きてたら、なんでもうまくいくという単純なもんじゃないんで、だからこそ、その一生懸命が本当にこう、おかげになっていくような、報われるような、

一生懸命の方向にしていきたいもんですよね。また、そうであってほしいなぁとも思います。

また、神様は一人一人に対してご慈愛(じあい)をもって、かわいいと思って下さって、おかげを皆さん一人一人に授けようとして下さるわけですから、こちらとしても謹(つつし)んでお受けしたいもんでね。生かされている以上やっぱり、ただ苦しんで一生終わるっていうんじゃ、こりゃもう残念ですしね。神様の願われるところじゃないんですもんね。本人だって願うわけじゃないでしょうけど、何より神様が願ってらっしゃることではないし、これじゃ神様も辛い思いをされる。

だから信心させて頂いて、神様のおかげを身いっぱいに受けるように、この身この心を神様に向けて信心して、枯れ木にも花が咲くし、ない命も繋(つな)いで頂ける。ただ「繋いで頂く」だけでもない、神様のおかげを頂くということは、幸せになっていくということなんですね。助かるというのんでもまあいろんな段階があるにせよ、人間のたましいが救われていくということが一番肝心要(かんじんかなめ)なところであって、そのために一生をかけて、神様はおかげを授け続けて下さるわけですから。こちらも頂くもんとして、日にちおかげをねえ、本当に頂いても、たれながしになっても相済(あいす)みませんから、頂く分をやっぱりこう活かしていく。

神様におかげを授けたかいがあったなぁと思うて頂くためには、やっ

ぱりありがたいことやった、幸せな一生やった、今の今おかげ頂いて幸せやなぁ、そう思わせてもらってお礼を申し上げてね、嬉(うれ)しい顔して過ごすことができるような、そんなおかげを頂きたいんですよね。それが一番神様の願いですから。

氏子が辛い悲しい顔をしてると、神様だってそれ見て辛くて悲しいでしょう。氏子に笑顔になってもらわんと。そのために神様は日にちおかげを授け続け下さっとりますから、神様のおかげを頂いて、自分も、また自分の大事な方も、神様も、みんなに喜んで頂けるように、今日一日、今日一日を、神様に心を向けて、信心させて頂きたいものやなぁと。一日一日の積み重ねでまた、ひと月を終えることができる。令和三年の一

月も、こうして今日一日をお迎えして、もう一日の七時間くらいになるんですかね、ってことは、あともう三分の二ちょっとくらいですかね、この日をつつがなく、無事に、おかげの中でお守りを頂いて、その中で暮らして、「神様、金光大神様（こんこうだいじん）」とお唱えしながら、お縋（すが）りしながら、今日一日おかげを頂き、そして今月を無事に過ごすことができましたというお礼を申し上げられるような、そんなおかげを蒙（こうむ）らせて頂きたいなぁと思わせて頂きます。

昨日までは、金光大神様（こんこうだいじん）について色々お話をさせてもらってきました。金光大神様のことについてもだいぶお話してきましたんで、また違うお

話しようかな思うんですけど、一月の区切りであるんで、今日は今日でもう少しだけ、目新しいことではないとは思うんですけども、金光大神様が大事になさったこと、あるいは神様から金光様がお知らせを頂かれたところを少しお話しようと思います。

明治五年の時に、神様から教祖様がお知らせを頂かれたんですね。「お知らせ事覚帳（おぼえちょう）」というのがありましてね、覚書（おぼえがき）とか、覚帳というのがあって、神様のご命によって、これまでを振り返って、教祖様が自分の一生を書くようにと言われ、でまた、神様のお知らせを頂いたことをできるだけ書き残すようにということで、残されてきたんですよね。

その中で、明治五年、これは、教祖様は五十九歳の時ですけども、ある時に、このように言われたんですね。

拝むと言うな、願い届けいたしてあげましょうと申してよし。頼む氏子の心で頼めいと申して聞かせい、わが心におかげはあり。

【覚帳】十六-二十一-一（十九）より抜粋

と、天地金乃神（てんちかねのかみ）様からお知らせがあったんです。もう一回読みましょうね。拝むと言うな、願い届けいたしてあげましょうと申してよし。頼

む氏子の心で頼めいと申して聞かせい、わが心におかげはあり。

「拝むと言うな」と言われてるんです、教祖様がね。神様から参ってくる氏子は、「助けて下さい」とか、「おかげ下さい」って、まあお願いにくるんですけども、じゃあ、教祖の神様は、拝んどきましょうと、お願いしときましょう、ご祈念しときましょう、とは、参ってくる氏子にもう言うなと。

私でいったらね、お結界（けっかい）で、「はいはいご祈念しておきます」と、これ言うなと言われたんですよ。なんでかっていうことになりますよね。じゃあ、ご祈念しとくとか、お願いしときます、とかいうことを、氏子にはもう言うなと。願い届けいたしてあげましょう。氏子の願いを神様に対

して、こういうおかげ頂きたい、ああいうおかげ頂きたい、というあなたの願いを神様に届けておきましょう。お届けいたしておきましょう、願い届けいたしてあげましょう、と申してよし。と、申してたらよろしいということです。

拝んどいてあげるからな、わしがよう願っとってあげるから、とは言うな。「あなたのお願いを神様にお届けしておきますからね」と、申しておきなさい。ってことなんです。

さらに、「頼む氏子の心で頼めいと申して聞かせい」、頼む氏子、まあ神様、頼むいうても、深く考えたらいろんな意味合いがあるんですけども、神様におかげを頂きたいと、願いを持っておられるわけで、皆ね。

で、神様にお願いして、おかげを頂けるようにね、お任せをしていくわけですけれども、その氏子の心で、おかげをどうぞ下さいという、氏子の心で本人がよくお願いして、一心に願って、そして頼んでいきなさいと。そうやって参ってくる氏子に申して聞かせなさいってことを仰るんです。

つまり願うのは、金光様にね、神様が、「おまえが願うんじゃない」と。お前が願うというたらあかん。参ってくる氏子のあなたのお願いはお届けしときましょうと。そうやって言いなさい。で、あなたが願い主、ほんで、氏子にもね、あなたが願い主なんやからあなたの心で神様にお願い

して、信心して、お願いして、おかげを頂けるようにしていきなさいよと、そうやって申して聞かしなさいと、こう仰る。

でわが心におかげはあり。わが心というのは、参ってくる氏子のわが心ですね。参ってくるあなたのその心、その心におかげがある。自分の心でおかげを頂きなさい。神様からおかげが出るとそう単純に思いなさんなよと。金光様からおかげを頂けると単純に思いなさんなよと。「神からおかげが出ると思わずに信心からおかげが出るんだと思って信心しなさい」という、そういうご理解もございますね。あなたの心でおかげを頂けるような信心して下さいよと。おかげはわが心にあり。あなたの心ひとつだよということですね。

じゃあ、教祖様は本当にね、そのお言葉通りに神様にお願いしなかったとは、私は思ってないんですよ、全然ね。そんなことはないですよ。そりゃ絶対そんなことはないでしょ。ただ、なぜわざわざこんなふうに言われたか言うたらね、やっぱりね、今の時代よりもあの時代の、それぞれ皆さん信仰はおありだろうと思うんですけど、この神様のところに参るというのには、自分が話を聞いて器を作るという考え方よりも、やっぱ祈念祈祷（きねんきとう）で助かるんじゃないかというふうにして、皆思っていたわけですよね。ま、日本全国どこでも基本そうなんやろうと思います。

じゃあ、金光様のところに行こうといってお参りに来てもね。拝んで

ちょうだいってなってくるんですよ、じゃ拝み屋なのかとなる。祈念ていうんはまあご祈念ですね。「祈祷」祈祷っていうのはね、祈念と祈祷とまあ似てるようでもね、ちょっと違うんです。

祈祷（きとう）というのは、神仏にその加護と恵みを頂けるようにと祈ること、儀式なんです、そのね。つまりこう、お祓（はら）いであったりとかね、お祭りなんですよね、一つの。祈祷というのはね、願いを受けて、まあそれこそ、お祓（はら）いしてもらって、で、御神前（ごしんぜん）に進んで、お祭りを仕えるやないけれども、そういう儀式（ぎしき）ですね。

儀式してもらったら、ああこれでよかった。金光様おかげ下さるんやなぁ、っていう形になってしまったら、じゃこれ、その当時の信心とい

うのんは、自分が改まるとかっていうんじゃなくて、あそこおかげ頂けるみたいやで、たくさん人が助かってるみたいや、よし行こ行こ。あっちでおかげ頂こ。あ、金光さん、私ちょっとこれで困ってまんねん。ちょ、助けてちょうだい。じゃあお金これ、お供えね、はい、じゃあ、祈祷して、ご祈念して拝んで。拝んでくれた。ああよかった、よかった。で、じゃあさよならで帰って、金光さんご祈念してくれたはずやからな、これでおかげ頂くの待っとこかない言うて、自分は何も変わらないですよ。ま、これが一般的やと思います。

ごくごく一般的で、その当時、お参りして、話を聞いて、自分の心を変えていかなくちゃいけない。難儀（なんぎ）には難儀になるような、自分の心、生

き方、性根（しょうね）になっとるところを、そこを問われて、そして自分の心を改めて、おかげを頂けるような心、性根、生き方に変えていきなさいなんてことはね、こんな面倒くさいこと言われることはなかったんですよ。

でもそれをね、神様は教祖様に対して、口耳があるから、参ってくる氏子に口耳ある者に話して聞かせなさいと、何をと言うたらおかげの頂く器の作り方。で、器いうのは、その人の心の器でしょう。おかげを頂くかどうかは神様とか教祖様じゃなくて、参ってくる氏子、あなたの心次第、それ次第なんよ。だから、おかげはわが心にあり。わが心におかげはありってなってくるんですね。

そうするとね、拝むなと、「拝むと言うな」っていうのがまあ正式には

そうなんですが、拝むなとは言ってないですよね。だからまあ私がいうのは、教祖様は拝んでらっしゃるというかね、ご祈念はして下さってると思っていますよ、お祈り添えはね。でもそれを氏子に言ってしまったらね、「ああ金光様祈ってくれるんや、わし祈らんけど、あんたお願いしてれるならオーケーや、頼むで！」と、自分を改めるということがもうないでしょ。

もし仮にね、教祖様がね、お願いしてあげたら、神様おかげを用意して下さったとしましょう。いやいやそもそも教祖様通さんかってもね、氏子は神様にとってかわいい子なんやから、お願いしたらね、おかげ授けたいと思って用意して下さるもんなんですよ、だからそんなにお願い

せんでもええんです。別にね。ちょっと言ったら分かって下さいますよ。苦しんでんの分かってたらね。

でもね、これ、神様おかげを用意してくれはっても、氏子の器がなかったら、授けようがないんですよ。だから安易に、ご祈念しときます、拝んどきます、なんて言おうもんなら、これもし教祖様が言ったらね、氏子はね安心してね、「ああ金光様祈ってくれはんのやな」と。あとはもう、自分の手元から離れて。自分の話やないんですよ。神様と金光さんの話やんか。金光さん頼むで、わしゃもう知らんで、あんたに託したから。じゃあね、ってなっちゃうんですよ。

やっぱり当時も多かったんですよ。まあそれしかないです。それが当時の信仰ですからね。全体として、日本国の。でもそうじゃなくて、この御道（おみち）は、話を聞いて自分自身の心を改めて、おかげを頂く器作りをして、そして、神様のおかげをしっかりと頂いていくという、器を作っていくというそういう御道（おみち）なんです。そこで助かっていくんですね。だから、この御道（おみち）は、祈念祈祷（きねんきとう）で助かる道ではないと。話を聞いて助かる神様なんだと、そういう神様を頂いていくんだということなんです。だから、拝むとは言うな。拝むなとは仰ってないですよ。ここね、大事なんですよ、誤解せんようにと思います。

拝むとは言うな、言っちゃいかんのです。拝んでもええけども、でも、

それ言うたらあかんで。やっぱり多くてね、神様、私には教えて下さっても、それ言うなとか仰ること、ものすごく多いですよ。

私が、まあ、そうですね、お取次（とりつぎ）させてもらってて、神様は分かりませんよ、例えですから、千知ってて、私が知ってていいようなことがまあ仮に十くらいあったと、まあ、百くらいあったら、教えて頂きましょう。でも氏子にいうのはいうたら一ですよ。で九十九はって言うたら、私の中に残しとくんです。これ、「言うな」ですよ。見えてても教えて頂いても、言うなですよ。

これもう、基本的にそうですね。今でもずっとそうですし、それはその人が信心初めだろうが、ベテランだろうが、ベテランってことも変な

話ですが、変わらんですよ。うん、言いませんよ。言うなって言われますから。そりゃその人が気づいていかんといかんというのもありますし、その人自身が心を改めていくということが大事。もちろんそれは、信心初めなんか、ちっちゃい子なんか、あるいはもう御道（おみち）の教師なのかによっても全然違いますよ、それは。導き方もね。

でも、神様はもう馬鹿正直にこっちがね、なんでもかんでもね、言えばええってもんちゃうんですよ。お知らせ頂いても。神様と教祖様の約束事なんですよ、これ。拝んどきましょうなんて、お前言うなよ、と。氏子は拝んでと言うてくるで。でもおまえ拝むなんて言うたらあかんで、分かった？　言うて。神様から言われてるんですよ、教祖様は。

じゃあ何を言ったらええか。あなたのお願いはお届けはしときましょうと。そやって言うときやと。間違ってもお前が「拝んどきます」なんて絶対に言ったらあかんでと。それ言うたら、氏子は信心せえへんやないか。信心せんかったら器がないし、器がなかったら、おかげの授けようがない。だからおまえが拝むなんて言うたら、それ氏子がおかげを頂けないことを、お前が加担すんのと一緒やないかってことなんです。

だから、拝むとは言うなと。心の中で拝むのは勝手やけど、氏子には言っちゃいかんってことなんですね。氏子には拝むなんて絶対言わんと、あなたのお願いはお届けしときましょうと、そうやって言っておきなさいと。

もう一個言っときなさい。頼む氏子、あなたの心、あなたの心が大事やから信心してね、あなたの心で神様にお願いして、そして信心して、器を作って、そしておかげを頂けるように待たしてもらいなさい。御時節（ごじせつ）を頂いて。ただお願いするだけじゃない。信心して器を作らせて頂いて、そしていよいよのところは、お願いした上はお任せやけれども、でもなんもせんと、ただ単に口をあんぐりして待っとくんと違う。信心して、器を作らせて頂いて。あなたの心が大事なんやから、私がお願いしてあげる、だったらそれでいいなんて思ったらあかんよ。私、お願いせんよ、いうことなんです、

要するところはね、それは言うか言わんかその時々でしょうが。いや

私は拝まんよ、と。あなたの心でおかげを頂き。話は聞かせる。お届けはしとく。あなたにもおかげの作り方は教えとく。あとはあなた次第やから。わが心におかげはあるんやから。だからおかげを頂けるようにあとは信心しいや。願い主あなたやろ、私がおかげ頂くんちゃうんや。あなたがおかげを頂くんやからな、言うて。

こうやって神様は氏子が信心することを促(うなが)してらっしゃるし、教祖様が安易にね、ご祈念しときますわ、拝んどきますわって言うことで、氏子が信心する気持ちを消してしまったり、くじいてしまったりせんように、取次(とりつぎ)する者として、そこはようあんた気いつけんといかんでと、注意して下さってるんですね。

教祖様は、まあ仰ってる神様の思し召しはよう分かるでしょうからね。ああそうですか、ああ分かりました、ああそうですねと、そらそうやと思いますよ。自分がこう、氏子がね、改まろうという、その気持ちが大事なわけで、信心するというのは、日々の改まりでしょう。改まっていくということは成長していくということで、より良い自分になっていくということでしょ。

でも、ただ拝んでってなってきたらね、わたしゃ変わりませんで。と。わたしこのまんまやけど、でもおかげはちょうだいって話になる、金光さん、あんたがお願いして、私におかげちょうだい。私は変わらへんでって。お金渡すからさ。お供えやるからさ。あとご祈念してや、祈祷して

や、儀式してや。おかげちょうだい。私は変わらへんでってなってくる。それじゃいかん。話を聞いて、自分の心を改めて、そして自分の心が変わっていく中でしかおかげは頂けないから、そこをよう分かって、信心しておかげを頂い下さいよってことなんですね。それをまあ、仰ったわけですね。

この御道(おみち)が祈念祈祷で助かるっていうんじゃなくて話を聞いて助かる神様であると教祖様が仰るのも、いやいやそもそもが天地金乃神(てんちかねのかみ)様がそう仰るのも、こういうところなんですよね。

ですんで、私はもう、参ってきた方にはね、ご祈念しときますって言

いますよ。で、まあ実際ご祈念します。でも言わない時もあります。お届けしときますで終わる時もあります。そういう時もあります。私の最後の一言、お願いしときますなんか、ご祈念しときます、お礼申しときます、お届けしておきます、まあ全然違いますよ。でも私は常にそこは意識してますよ。この二十年間ね、どのお取次(とりつぎ)でも意識します。

それは私が嘘(うそ)つかんためにね。お届けはしときます、って言う時には、お届けするということは結局はあなた自身がちゃんと気づいて改まらんといかんからね、ということでもあります。それをい言う時もあれば、いわずにだまって、祈って待たせてもらうときもあります。たとえ十年でも百年でも待ちますよ。神様はそれを言わずに待てと言われたら待ち

ますよ。それは私と神様との間柄の問題でね。氏子の守役(もりやく)でもあります。神様の守(も)りですけどね、一応守りではあるんですけど、教えの中で神に守りはいらんと、氏子に守りはいるといわれますけど、そりゃそうですわね。子守見たいなもんでね。神様は親神様でこっちが守りするなんてそんなおこがましいことないですけどね。まあ番人みたいなもんですよ。

でもそれを守りといいますから、日本語では。ま、神様の守りっちゃそうなんですけど。実際にはそのね、守(まも)ってもらえるような存在でもないし、守れるような御存在でもありゃしません。だから神様に守りがいるんじゃやなくて、必要なのは氏子であってね。子守が大事なわけで。それをさせてもらうんが私のお役です。

でも、その子守のお役ですから、どうやったらおかげを頂けるんかなぁいうことを思いながら、お話はさせてもらう。だから氏子の味方になるし、でも根本でね、神様とよう相談しますよ、やっぱり。十年、百年単位でね、とにかく私は「百年先を見据(みす)えて取次(とりつぎ)せい」と、ずっと言われ続けてきましたんでね。百年っていうたらみんな、その人も死んでますよ。でもね、死んで、死んでということは、死んでその人が御霊(みたま)になっても助かるように、そのために今信心させんといかんいうとこなんです。

私がなんでもお願いしてね、じゃあ、それで神様のパイプがあるからといっておかげを頂いたとしましょうよ。でもそれねえ、何も意味ないんですよ。その人自身はなんにも変わってないから結局ね、天地の道理

からずれてるんでね。生き方が。めぐりを積ませてるんですよ。めぐりを積んで、生き方を放置してるってことになるんですね。これ一番いけませんでしょ。めぐりを積んじゃうんですから。だからそないならんように、こちらとしては、自分がもうちょっと、その問題解かれへんのなら貸して、答えぱっとやるわ、とやったほうが楽は楽ですけど、そうはいきませんわね。その人が成長してなんぼですもんね。ここは習いにきてるんですもん。塾に行ってそら問題分からん言うて、塾の先生がパッと解いたらそりゃ塾の先生も簡単やろうけど、意味ないわねえ。

本人が解けるようになるように、本人のペースでね、本人のペースでちょっとずつでも、勉強できるように、ピアノ弾けるように、ちょっと

ずつ本人のペースでいい。人と比べてもしょうがないですよ。比べようがないですしね。頂いているもんも違うからさ。

そやけど、前の自分と、一年前の自分と、今とやったらちゃうとか。三年前の自分と今の自分やったら、引き算したら、ああこんだけ成長してたなっていうのが出てくる。やっぱそこが大事でね。成長が早いとか遅いとか、もう人と比べてもしょうがないけど、でも、前の自分と、今の自分とやったら、そりゃ甲斐(かい)がありますよ。意味がありますよね。それだけお育て頂いてきたんやなぁ、信心の稽古(けいこ)、自分もさしてもらってきたんやな。稽古しただけのことは必ず出てきますから。だから信心せんとあきませんよね。信心の稽古をさせてもらわんとあきません。

そのお手伝いを、私はさしてもらうし、それは神様とようご相談した上で、神様に教えて頂きながら、神様がこの氏子を助けるための、その道筋といいますかね、育て上げていく、学習さして、成長する、教育する上でのカリキュラムがありますから。

それをお聞かせ頂きながら、それになるたけ合わせられるように教えてあげたり、気づかせてあげたり、ずっと待ったりということを、それぞれの立場で、それが生まれたての赤ちゃんなんかね、それかもうだんだん分かって小学生ぐらいなんか、もう高校生くらいなんか、もうええ大人なんかね。それとも氏子なんか、信徒なんか、教師なのかとか、それによっても違いますわね。

教師いうても一年目なのか、三十年目なのか、お結界(けっかい)座ってそれぞれの広前(ひろまえ)で御用してる人なんか、御裏で頑張ってらっしゃる御用なのか、あるいは教務という形でね、御用されてるのか、それぞれの立場がありますから。それに合わせて、神様だって、持ち場立場で信心を育て上げようとして下さるからねえ。それに合わせてこちらもお取次(とりつぎ)は変わってきます。

でも、神様が一人一人にその人をお育て下さろうとする教育カリキュラムがありますから、それを教えて頂きながら、それを元にしながら、今その人にとって必要なお取次(とりつぎ)をさせてもらう。目指す先は百年先、この人が御霊(みたま)として浮かばれていけるようなね、安心しておかげ頂かれる

ような、そこを願わせて頂く。

あるいは神様としてはこの氏子にはもう、生きてる間に神になって、死んでからも御霊(みたま)の神として御用立てるくらいまで育て上げてとなるかもしれんし、叩(たた)き上げようとされるかもしれんしね。それならそれなりのところを通らざるを得ないでしょうし、まあ、そこを祈りながら待たせて頂くこともちろんある。それはもうそれぞれ、それぞれ、百人百様、千人千様の育て方がございますわね。

考えてみたら、子育てしててもね、皆違いますからね。私もね、子どもね、育てる機会を、今やったら五人頂いてますけど、皆違いますもんね。もうそれぞれですよね。千人おったら千人ちゃうし、同じようにはいき

ませんよ。毎回ね。自分の持ってるもんなんてわずかで知れてますから。もうみんなちゃうんやからね。何十億人いたら、何十億人皆ちゃうんやから。それを分かってらっしゃるのは神様やから。神様がその一人一人に向けて特別な教育、成長、学習、カリキュラムを作られる、願われる。それに沿って、その人がちょっとずつでも信心しておかげを頂けるようにと思うて、お取次（とりつぎ）をさせてもらいます。

だから、おかげはみんなに頂いてほしいけど、安易に私がお願いしといてあげるからとは単純には言いませんよ。でもお願いして、安心して、その上で、信心頑張ろうというんやったらそら言いますけどね。でも、

この人が、私がお願いだけしてたら、この人はもう信心する気なくなるわと思うんやったらそりゃ言いません。もう、先生お願いせえへん、あんた自分でしいや。お届けはしとくけど、おかげ頂けるかどうかは、もうあんた次第やで、もう先生お願いせえへんで。だから、お届けはしとくよ。でもあんたの心一つやから、自分でしっかり信心して。お話はずっとしたやろ、今。その話ししたことを、ちゃんとよう心に止めて、そのお手本見ながらら自分の心を変えていき。お育て頂き、改まっていき、そのお稽古(けいこ)をし続けや。できない？　いや、できないからしてんねんやないか。できるんやったら意味あらへんやないか、教えることあらへんわって。あんた天才やないかって言うて。できひんからこそ学んでるし、

教えるし、教えてもらったことをお稽古して、何度でもお稽古して、何度でも失敗して、願いを立てて、稽古をして、失敗繰り返して、苦労したらだんだん身についてくる。どうかこういう心にならせて下さいてお願いして、お願いしながら稽古して、苦労したら身についてくる。それをあなたがせんかったらおかげにならんから、だから先生お願いせえへんで、って。大体はこうやって丁寧（ていねい）に言います。言わん時もあるけど。

まあこれも人それぞれですね。神様の仰せのとおり、「言うてやれ」いうたら今日言うし。「言わんでもええからほっとき」って言うたら、本人が気づくまでまあそこまでいくには何回も言うてるはずなんですけどね。まあ、場合によったら痛い目あうまで待つ、しょうがない時もあります

わね。そんなんしたいわけじゃないけど、しょうがないです。それはね、言うてきかせても、言うてもきかんのやったらどうしようもないですから、現実が教えてくれるしかありゃしませんわな。そんな時もあります。

それでも見捨てるというわけじゃなくって、祈りながら待たせてもらうし、付き合っていくしかしょうがない場合だってあるでしょうね。

まあ、皆信心する人も色々や。でも誰一人として、かわいくないってことはなくて、みんな神様の愛(いと)し子ですから、どうか信心しておかげ頂いてくれという、その気持ちは、神様も、私も、教祖様も、皆一緒ですから。どうかそれぞれ、頂いている今日一日のね、信心ドリルが今日一日

ありますから、今日も一日スタートしてね。今日一日、神様から計算ドリル、漢字ドリルと同じように、信心ドリルを頂いてるんです。だから、その時その時、心を神様に向けていく。

信心ってそうでしょ。しんはわが心やし、じんは神様やし、心が神様に向かうのを信心って言うんやから。お取次(とりつぎ)頂いて、教えて頂いたことを手本にしながら、よう見ながら、信心していくんです。それを今日一日お稽古してったら、一日した分だけ成長していきますからね。身についていきますから。まあ信心は習い事ですから。信心も手習いも同じことです。一段一段です。一段一段言うても、三歩進んで二歩下がるの繰り返しの一段ですからね。

まあどうぞ今日も一日、神様から頂いた命を使わせてもらいながら、この肉体を使ってね、信心の稽古（けいこ）に励ませて頂きたいと思います。どうぞおかげを頂いて下さい。今日は一月の終わりですからね。やっぱり今日は今日でお願いしながらやけど、今月今日（こんげつこんにち）の今月ですから、一月間のお礼を申し上げる。で、自分のこと、できたら家族がいたり、子どもさんがいたりする場合であればね、自分のことだけやなくって、子どもたちのことやら、おじいちゃん、おばあちゃんのことやらね。子どももそうですね。みんなおかげ頂いてありがとうございます言うて、自分以外の人のことも含めてね、お礼を申せたら、そりゃ神様も喜ばれますよ。

はい、どうぞおかげ頂いて下さい。よくお参りでした。

（了）

津田昇平教話　第三十一話

令和三年一月三十一日　朝の教話

発行日　令和七年三月二十日

発行所　金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三―七―五

落丁本・乱丁本はお取り替え致します。